別表５
⑶

主　論　文　要　旨

No.1

報告番号	甲 乙　第　　号	氏　名	奥山　睦

主 論 文 題 名 ：工場密集地域の再活性化プロジェクトとその波及効果
―工場主の連携・幸福度の向上及びイノベーションの促進―

（内容の要旨）

日本の中小製造業は①経済成長の低迷、②大企業の海外進出による産業の空洞化、③若年人口の減少による労働力不足、④産業のサービス化等の影響により厳しい経営環境にさらされている。さらに第四次産業革命の到来による大変革期にあり、グルーバル化の潮流を受け、従来型の取引構造では、大企業、中小企業双方にとって、イノベーションが生まれにくい状況にあり、国際競争力を持ちにくい。

このため、本研究では、産業施策として重要な位置づけである工場密集地域が再活性化を図るためのプロジェクトに着目し、工場主の連携・幸福度の向上及びイノベーションの促進への波及効果を明らかにすることを目的とする。

まずはイノベーション及び工場密集地域における主要な先行研究を整理し、そこから導き出される論考から、本論文で引用すべき主たるものとして、G. Carayannis, David F.J. Campbell による Quadruple Helix Model、Roberto Verganti による Design Driven Innovation について掲出した。

そして、国内外の工場密集地域で再活性化を図ってきた先行事例を調査した。海外ではスイスのジュラ州、ドイツのルール地方を、日本では燕市、諏訪市を挙げた。

これらの地域には、脈々と根付いてきた確固たる基盤技術がある。それを踏襲しつつも、社会・経済の変化に対応すべく、時代毎に基盤技術をベースに産業を変化させていった歴史がある。また、企業間ネットワークにも変化が現れている。各企業に分散されていた技術や知識を広域的・横断的に結合させ、地域で共有する試みが行われ、販路拡大のために自治体や国を始め、さまざまなステークホルダーがバックアップし、地域再活性化へと繋がっている点は、注目に値する。

国内においては工場密集地域の工場主の集合体が、ツリー型から水平ネットワーク型に構造変化が起こる段階にイノベーションが促進され、地域再活性化が図られることに着目した。そのためには工場主自主参加型協働プロジェクトが有効であることを示し、国内代表事例として、大田区の「下町ボブスレーネットワークプロジェクト」、墨田区の「江戸っ子１号プロジェクト」を取り上げた。

これらの事例は、第４次産業革命の潮流を捉えつつも、工場密集地域が持つ日常的に顔をつきあわせる関係（face to face relationship）の維持がそのメカニズムの重要な柱になることが読み取れる。それによってもたらされる工場主たちの連携と幸福度が、地域再活性化へ寄与することへの妥当性と有効性を Design Structure Matrix（以下 DSM）、幸福度、計量テキスト分析によって検証した。

その結果、工場主たちの連携と幸福度向上の傾向が明らかになった。また、計量テキスト分析ではそれを裏付けるワードが多数現れた。

以上のように本研究では、従来の経営学的な中小企業や産業集積研究に DSM、幸福度、計量テキスト分析を加えるとともに、工場密集地域の地域再活性化を図るためには地域プロジェクトにかかわる構成員の関係性の深化が寄与するという新たな視点を加えることによって、地域イノベ

別表５

⑶

ーションの促進から地域再活性化までのプロセスを構造化して捉え、工場密集地域の再活性化プロジェクトが工場主の連携・幸福度の向上及びイノベーションの促進に波及効果を有することを明らかにした。